

ding

大学生の読書の今を探る

―多様化するスタイルと変わらぬ価値―

若者の読書離れが叫ばれるようになって久しいが、2025年2月に全国大学生生活協同組合連合会が発表した第60回学生生活実態調査によれば、一日の読書時間を「ゼロ」と回答した大学生は45・6%にのぼり、ほぼ半数の大学生が本を読む習慣を持たないことが明らかになった。また、媒体としても、これまでの紙の書籍だけでなく、電子書籍やオーディオブックなどデジタルメディアの普及によって多様化し、それに伴い「従来型の読書」は減ってきているのかもしれない。しかしながら、読書を通じて得られる読解力や論理的思考力、新たな価値観との出会いなどは、読書の在り方が変化しても変わらない普遍的なものだろう。

また、大学の図書館も時代の変化やニーズにあわせてそ

CONTENTS

人は読書する生き物です

―大学生と読書―

芝井 敬司

学校法人関西大学理事長

ライブラリーサポーターの活躍

加藤 一平

成城大学図書館事務部長



Importance of rea

の在り方やサービスも変化してきており、近年では、本を読む場所だけではなく、学びの機能の充実も図られている。図書館は高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤として必要不可欠な場所となり、ラーニングコモンズのような機能を有する図書館や、デジタル時代に対応した知の拠点として、電子書籍の貸し出しやアプリの活用などの新たなテクノロジーを活用した図書館もでてきている。

本企画では、まさに変革の時をむかえている読書について、識者による寄稿と大学図書館のさまざまな取り組みを通じて、大学や教育現場における読書の価値を再考する機会としたい。



情報と人をつなぐ場

―関東学院大学関内デジタル図書室が目指すもの―

立石 文恵

関東学院大学図書館運営課課長補佐

紙の読書とデジタル読書

植村 八潮

専修大学図書館長代行・文学部教授

大学生はもう本を読まないのか？

―図書館職員の視点とデータからの発見―

紀平 宏子

国際基督教大学図書館主査

「大学生は本を読まない」は本当か？

―調査から考える読書推進のヒント―

大築 匡

全国大学生生活協同組合連合会広報調査部

人は読書する生き物です

—大学生と読書—

芝井 敬司

学校法人関西大学理事長

はじめに

2025年2月28日に、全国大学生生活協同組合連合会が発表した第60回大学生生活実態調査（概要報告）によれば、2024年秋の調査時点で、1日の読書時間を「ゼロ」と回答した大学生は、45・6%だった。読書ゼロの大学生は、2013年に40%を超え、2017年には50%を超え、その後もほぼ40%台後半にとどまっている。今や、ほぼ半数の大学生には本を読む習慣がないという残念かつ悲惨な結果である。

この調査結果を、私たちはいったいどう考えたらよいのか。近年着実に進行した大学進学率の上昇を考えれば、「大学生が本を読まなくなった」のではなく、「本を読ま

ない層が大学生になっているのだ」という皮肉な見方もある。しかし私たち大学関係者は、都合の良い諦めを理由にして、この問題を見過ごすことなどとてもできない。なぜなら、「読書こそがあなたの理解力、思考力、判断力を培い、あなたの人格の成長を約束し、あなたの人生を豊かにする」という当然にして大事なことを、これからの社会を支える若者に、大学がしっかりと伝えられな

いとすれば、真に豊かな未来社会など、とうてい期待できないからだ。

大学が、学術研究によって培われた高度な専門的学識を教授・学習する場である限り、そしてそこで学ぶ大学生たちにとっては知的および精神的な成長をはかる場である限り、読書が持つ意義をけっして軽視してはならない。そこで、2018年から関西大学では大学生を読書にいざなうさまざまな取り組みを始めた。

1—ことばと文化について

さて、本の世界について考える前に、一つ大事なことを確認しておきたい。

一般に、言語はコミュニケーションの手段だと考えられている。たしかにそのこと自体は間違いない。『広辞苑』で「言語」を引けば、「人間が音声や文字を用いて思想・感情・意志等々を伝達するために用いる記号体系」と書いてあるのだから。しかしながら、私たちがこゝとばを単なるコミュニケーションの手段でしかないと考えている限り、ことばや本、そして読書の重要性について、考えを広げ深めていくことはできない。

長田弘『読書からはじまる』（ちくま文庫、2021年）は、この点をはっきりと指摘している。「わたしたちは日本という国に生まれたと思いますが、そうではなく、日本語という言葉のなかに生まれたのです」。そして、「肝心なのは、どこの国の人かということより、一人一人がどういう言葉のなかに生まれ、どういう言葉によって育てられて、育ってきたかです」と指摘している。つまりところ私たち人間は、「言葉のなかに生まれて、言葉のなかに育ってゆく」生き物だと、長田は断言する。

ことばと人間のこうした関係は、少し広くとらえてみると文化と人間の関係にたどり着く。クリフォード・ギアーツは、『文化の解釈学Ⅰ』（岩波現代選書、1987

年）において、マックス・ウェーバーに同意しながら、「人間は自分自身がはりめぐらした意味のクモの巣のなかにかかっている動物である」と私は考え、文化をこのクモの巣としてとらえる」と述べている。それゆえ、私たちは人間は文化のなかに産み落とされ、文化のなかで育ち育てられる存在であるということになる。

人間存在にとつて、ことばは欠くことのできない要素であり、長い歴史を背負った人間の文化の中核をなし、時に私たちの人としての成長を氣遣い、保証してくれている母そのものののだといえる。そうであるならば当然のこと、ことばは単なるコミュニケーションの手段ではない。それは、私たちの認識を形成し思考を育む。そもそもことばがなければ、事物や概念を認識したり、ものを考えたりすることなど、まっとうにはできないだろう。

だから長田は、「まず言葉があつて、自分があつて、そして人がいる」と考えるべきだと述べる。「人は何でできているか。人は言葉でできている。そういう存在なのだと思うのです。言葉は、人の道具ではなく、人の素材なのだという事です」。

同じような観点から、宮崎哲弥は『教養としての上級

語彙―知的人生のための500語―』（新潮選書、2002年）のなかでコミュニケーションの手段としてのことばという常識を批判する。宮崎は、言語哲学者の井筒俊彦の『意味の深みへ』（岩波文庫、2019年）を引きながら、現実世界とことばの関係を以下のように説明する。

「一般に、まず世界があつて言語はそれを分別するための装置、記号のようなものとされている。だが、事態はむしろ逆であつて、そもそも言葉なしに世界は現象しない」。つまり、事物の多様性が言葉の多様性をもたらすのではなく、ことばの多様性が事物の多様性をもたらすと言ふのだ。

2―読書離れと100冊の本

大学生たちは自分の将来について、真剣に考えたことがないのだろうか。少しでも真剣に自分の将来のことを考える人であれば、学生時代のうちに本や新聞をしっかりと読む習慣を身につけることが、どうしても必要だと分かっているはずだろう。言うまでもなく、本を読むことは大学生にとってもっとも大事な基礎作業であり、ま

た間違いなく自分自身の成長につながる。

先述のように、学生生活実態調査において、読書時間を「ゼロ」と回答した大学生が初めて50パーセントを超えたのは2017年のことだった。当時、学長職にあった私は、その結果に大きなショックを受けた。そこで、大手書店に協力をお願いして準備を進め、新入生に向けた2018年の入学式で、読書の意義について私のメッセージを伝えることにした。

「あなたが自らの人生を大切に生きていくために、私たちは今回、100冊の本をリストアップしました。私が学長として20冊、さらに紀伊國屋と丸善雄松堂の2つの大手書店のご協力を得て、書店の目利きの方からそれぞれ40冊を推薦していただき、『新入生に贈る100冊』と題したパンフレットにして、いまみなさんの手元にお配りしています」。

ところで、100冊の本といえば、今から50年前、高校の卒業式を控えた私は、国語の先生から「私が薦める100冊の本」と書かれたプリントをもらった。著者、タイトル、出版社がびっしりと書き込まれたプリントをもらった私は、大学に合格してから、なけなしの貯金をはたいて薦め

られた100冊を買い求めた。1日1冊のペースでこなし
ていて、1回生の夏ごろには読み終えた。トルストイや
ドストエフスキー、バルザックやスタインベック、三島由
紀夫や安部公房、大江健三郎や倉橋由美子もあった。シュ
リーマンの『古代への情熱』やロバート・オーウエンの『オ
ウエン自叙伝』も心に残っている。

私は、入学式の式辞を以下のように結んだ。

「あなた方は、身分・形式上の大学生ではなく、本物の
大学生になるために、これからずっと本を読まなくては
なりません。お金をやりくりして、これはという本を買
わねばなりません。本や新聞を読まない人を生涯の友人
に選んではなりません。まったく本や新聞を読まない人
を、会社が喜んで採用してくれるでしょうか。まさか、本
や新聞を読まない人と結婚して、かけがえのない生涯の
伴侶とされるつもりではないでしょうね。あなたが家庭
を持ち子どもに恵まれた時、自分の子どもを、まさか本
や新聞のない家庭環境のなかで育てるつもりではないで
しょうね。もし今、あなたに本を読む習慣がないのであ
れば、今日から本と向き合う決心を固めてください。そ
れこそ、これからあなたが自らの人生を大切に生きてい

くために、今しなくてはならない大事なことです」。

私の式辞は、幸運なことに数紙の新聞で取り上げられた。
反響はそれだけではなかった。『新入生に贈る100冊』
のパンフレットは、入学式に別会場の大型画面で参加した
5000人を超える保護者にも配られた。私は式辞のなか
で、「保護者のみなさま、4月23日はスペインのカタルーニャ
地方で、親しい人に本を贈る日、サン・ジョルディの日で
す。現在はユネスコによって「世界、本の日」として知ら
れています。ご子女の入学を記念して、えりすぐりの1冊
をご本人にプレゼントしてください」とご父母に呼びかけ
た。パンフレットを持って「帰りに梅田の書店で本をさが
します」というご夫婦もいらっしゃった。

その後も、パンフレットを知った在学生の保護者らか
ら「分けてほしい」とのお申し出が相次いだ。ご自分の
勤務する企業の若手社員に読書してもらうためのツール
として分けてほしいという申し出もあった。

若者の読書離れをなんとか防ぎたいという思いは、実
は本が好きな学生のなかにもある。関西大学総合図書館
の職員や書店員の協力もあって、学生だけで選んだ本を
特集する「特集本展示」や、紀伊國屋書店と共催の「P

OP講座」、図書館にある本を紹介する「コアラ通信」の発行など、学生らしい活動が繰り広げられた。

100冊のパンフレットに触発されたのか、政策創造学部や人間健康学部では学部版の100冊の本がまとめられ、人事課では『新入生に贈る100冊』をまねて、新入職員に向けた書籍リストが、毎年作成・配布された。

3 『新入生に贈る100冊の本』第2弾

2019年の新入生にも、入学式の学長式辞で次のように語った。

「みなさんの多くは、『スマホ・ネイティブの世代』といわれています。ステイヴ・ジョブズが率いるアップルによって初代のiPhoneが発売されたのが、2007年6月29日のことです。もう12年近くが経過した計算になります。みなさんの多くにとって、小学校に入った時からスマホがあったということになります。ケイタイからスマホへ、機能もまた大きく広がり、とても便利になりました。通話とメール、ニュースとゲーム、ウェブの検索、その程度の使い方から、Facebook、Twitter、YouTube、

LINE、Instagramなど、さまざまなSNSの利用へと大きく拡がりを見せてきました。思えば、まことに便利な時代になったものです。

こうした時代に生きるみなさんのなかには、『いまさら本かよ』と考える人がいるかもしれません。しかし、はっきりと言っておきます。『スマホがあれば十分、もう本や新聞を読む必要はなくなった』と考えるのは、明白な間違いです。こうした考えは、将来のことを見通した判断ではなく、十分に検討した結論でもなく、たんに目先の効能に振り回された考え、すなわち短慮であると言わねばなりません。

確かに私たちは、スマホを通じて、『スピード感ある短い文章、インスタ映えするきれいな写真、おもしろい動画』を楽しむことや、『日々の生活に必要な情報を手っ取り早く手に入れる』こと、さらに『友だちと気軽な会話をやりとりする』こともできます。しかしあなた方が、しっかりとした人間として生きていくとするのであれば、スマホに頼るわけにはいきません。

あなたがどんな人生を生きるべきか真剣に考えたいと思うとき、自分は何であるのか、人間とは何か、社会と

は何か、社会や世界はどう変わっていくのか、こうした問いを考えようとするとき、あなたはスマホ以外の手段に目を向けなくてはなりません。

そんな時に本は、あなたに光を与えてくれます。読書を通じて私たちは、心が震えるほどの感動を覚えることや、深く考えさせられる経験に出会います。いやそれどころか、まったく人生の目的が変わってしまうほどの大きな影響を受けることすらあります。小説家の角田光代さんの印象的な言葉を引用しておきましょう。『旅からも、人との交わりからも、勉強からも、人は学ぶことができる。しかし、読むことでしか耕せない場所があり、読むことでしか実らない作物がある』。

おわりに

テレビCMやチラシに出てくるマンションや新築戸建ての広告を見て、いつも違和感を覚える。どうしてそこには本棚もなく本もないのかという疑問のゆえである。瀟洒なインテリア、整頓されたリビング、清潔なキッチン、小奇麗な子供部屋はあっても、そのどこにも肝心の本と

いう存在がないじゃないかという違和感である。しかし一方でそれは、今や日本人の多数派にとって、本が生活一般の必需品ではなくなったことを、私たちに雄弁に物語っているのかも知れない。とすれば、大学生の読書離れを嘆く私たちの社会自身こそが、本当に大事なものをこれまで平然と軽視し無視してきたのではないか。

最後に、史上最年少の17歳で、ノーベル平和賞を受賞したマラーラ・ユースフザイさんが、2013年7月12日に国際連合で行ったスピーチの一節を挙げておく。広く教育に関わる私たちは、学生の読書離れを嘆くばかりではなく、学生が本と向き合うことの真の意義を、彼らに繰り返し諦めずに説き続けなくてはならない。「1冊の本は、時に世界を変える」のです。

“One child, one teacher, one pen and one book can change the world. Education is the only solution. Education first.”

「1人の子ども、1人の教師、1本のペン、そして1冊の本が、世界を変えることができます。教育こそがただ一つの解決策です。何をおいても教育こそが第一です」。

ライブラリーサポーターの活躍

加藤 一平

成城大学図書館事務部長

はじめに

東日本大震災のあと、本が好き、図書館が好きという学生たちと図書館スタッフとの交流が始まった。きっかけは選書ツアーなどの図書館イベント。

その後、活動の範囲はさまざまに展開し、あるときから「ライブラリーサポーター」と名乗るようになった、と聞いている。

そんな歴史を持ち、現在成城大学（以下、本学）に存在する各種サポーターの先駆的存在ともいえるべき「ライブラリーサポーター」だが、現在では、年間の各種活動を通して、図書館の充実した運営に欠かせない存在となっている。

そして今回、彼らならではの視点で「大学生の読書」を考えると、いうまでもない機会をいただいたことが、彼らの活動のさらなる深化・進化につながることを期待している。

ライブラリーサポーターの活動目的

社会イノベーション学部 2年 上野友郁

ライブラリーサポーター（通称LS）とは、学生が図書館をより使いやすくするために、学生目線で図書館をサポートする本学の6つのサポーター団体の1つである。学生の図書館利用者を増やすことを目的に、さまざまな企画・活動を行っている。

4月には新入生を対象とした図書館の利用方法を説明する図書館ガイダンスがある「写真1」。7、8月のオープンキャンパスでは、図書館を一般開放し高校生向けに図書館ツアーを行っている。館内の説明だけにとどまらず、受験生や保護者からの受験勉強の悩みや学生生活の疑問にも答える場となっている。11月は文化祭での図書

館を利用したイベントや全国のサポーターが一堂に会する本学主催のサポーターズフォーラムにも企画運営から参画している「写真2」。

このようにLSでは図書館の魅力を発信するため活動を行っているが、その中でも代表的な3つの活動を紹介したい。



〔写真1〕新入生対象図書館ガイダンス

1—ウェブでおすすめ資料紹介

社会イノベーション学部 2年 上野友郁

大学図書館のウェブページ内にはLSに関する「from LS」というページがあり、LSの活動紹介と、メンバーおすすめの資料紹介記事を読むことができる。本学の図



〔写真2〕文化祭での講演会イベント

書館では映像資料の視聴もできるため、書籍だけでなく映画などの視聴覚資料の紹介もしている。主に学術書を所蔵するのが大学図書館であるが、このページで紹介している資料の多くは小説で、本を読むことが苦手であったり、読む本を探すことが難しいと感じたりする学生には、本に触れるきっかけになると考えている。記事の書き手としても、本の内容や感動のポイントを理解しようとよく読み込み、自らの言葉で発信できる貴重な機会と捉えている。

2 ポップの展示

文芸学部 2年 渡邊 咲衣

これは、小学校や中学校、高校での図書委員会と共通する活動かもしれない。

3カ月に一度、「夏を涼しく過ごせる本」「美味しいご飯が食べたくなる本」など、上級生が決めたテーマに沿って、LSメンバーが図書館に所蔵している資料で紹介したい本を選ぶ。そして選んだ本を、読んでみたいと思っ

てもらえるような紹介文と、イラストなどを描いたポップを作成する。絵を描くことに苦手意識があっても、フリーイラストやエフェクトを用いてデジタルで作成し印刷することで、対応している。

作成したポップを選んだ本とともに、図書館1階に3カ月程度展示している。

展示している本はもちろん借りることができる。ポップの効果もあってか、よく貸し出されており、学生の読書推進の一助となっている印象を受ける「写真3」。



[写真3]ポップの展示

3 Librarieからの選書

経済学部 2年 大橋 日花

Librarie（ライブラリエ）とは、ストリーミング方式で配信される電子書籍を借りて、スマートフォンやPC、タブレットから読むことができる、クラウド型電子図書館サービスである。学外からでもアクセスが可能という特性がある。Librarieには学術書に限らず小説、実用書などのライトな資料も収蔵されているため、学習、課外活動、就職活動など学生生活のあらゆる局面で広く利用することができる。2024年度からLibrarieを導入し学生と教職員を対象に利用が可能になった。

初回は、Librarieに搭載する資料をLSが選定協力した。ここでの選書では学生の興味関心が高いと思われる資料を予算内で選定した。さまざまなジャンルから計65冊の資料が選ばれ、「LS選定資料」としてお知らせに掲載された。この中には貸し出しランキングにランクインした資料もあり、学生目線の選書が好評だったことがうかがえる。Librarieの選書は主に学部生が対象のため、学

生自身のお気に入りの本や読んでみたい本を購入できる良い機会につながっている。

今後の展望

本を読む当事者である学生である強みを生かして、今後も教職員と「協働」して図書館の魅力を発信していきたい。



情報と人をつなぐ場

— 関東学院大学関内デジタル図書室が 目指すもの —

立石 文恵

関東学院大学図書館運営課
課長補佐

はじめに

関東学院大学は、平潟湾からの海風を感じる広大な敷地にあるメインキャンパスの横浜・金沢八景キャンパスに加え、2023年、国際都市横浜の行政と商業の中心地である関内地区に、地上17階・地下2階建て都市型の横浜・関内キャンパスを開校した。本学図書館は、横浜・金沢八景キャンパスの本館・分館の2つの図書館、横浜・関内キャンパスの関内デジタル図書室で構成されている。横浜・関内キャンパスに新設する図書室を構想する中で最も大きな課題となったのは、図書館という独立した建物ではなく、ビルのワンフロアという限られた空間の中で、

これまでと同じレベルの蔵書とサービスをどのように利用者に提供するのか、ということであった。スペース上、数十万冊の資料配置が困難であることから、改めて図書館の果たすべき役割と機能を問い直し、次の5つのコンセプトの下、デジタル図書室を構築することとした。

1— 電子リソースを中心に提供する

本学図書館では、以前より電子ブック、電子ジャーナル、データベースといった電子リソースの導入を進めていたが、「紙の方が読みやすい」「紙の手触りや匂いが好きだ」といった利用者の紙への愛着や、国内では電子化されない学術書・専門書も多いこと、機関向け電子書籍は紙書籍よりも高額であること等の問題があった。しかし、電子化により利用者の利便性が向上すること、保存場所を必要としないこと、複数キャンパスで利用可能といったメリットから、新キャンパス図書室の構想を機に、電子化をさらに拡大することとした。

そのような中、コロナ禍でオンライン授業が普及し、自宅からアクセスできる電子書籍の利用が大幅に増加し、

図らずも急速に電子化が進んだことで、いつでもどこでも利用できるという電子リソースのメリットを利用者も体感することとなった。電子リソースの利用は年々増加しているが、この流れをさらに加速させるべく、ディスプレイサービス（図書館が提供するさまざまなリソースをひとつのインタフェースで検索できるサービス）の整備や書店と連携した電子書籍選書イベント等でさらなる利用促進を図っている。

2 ハイブリッドに紙書籍も提供する

電子化が急速に進んだとはいえ、紙書籍のみで刊行される学術書・専門書もまだ多く、当面、紙書籍がなくなることはないと考えられた。そこで、必要最低限の従来の紙書籍も新キャンパスに配置することとし、学部・学部に応じた分類から利用頻度の高い資料約1万2000冊を教員と選定した。しかし、この冊数だけでは学修・研究に資することが困難であり、これを補うためには、メインキャンパスと書庫にある123万冊の蔵書の活用が不可欠であった。

全館の蔵書はスマートフォンやパソコンでOPAC（蔵書検索システム）から簡単に検索・取り寄せができる。取り寄せした資料は一日に1〜2便キャンパス間を往復する車で翌日には利用者の手元に届く仕組みとなっている。

本学では、初年次情報リテラシー教育における情報検索ガイダンスを図書館職員が実施しているが、新キャンパスでは目の前にある蔵書だけでなく、全キャンパスの資料をフル活用することが非常に重要で、さまざまな分野の蔵書は歴史ある総合大学図書館の強みでもあることを伝えている。また、蔵書量を印象付けるために、書架がズラリと並んだメインキャンパスの書庫を巡るメタバース体験も実施しているが、「海外映画で見たシーンのようだ」と驚く学生も多い。取り寄せの必要性は学生に浸透し、毎日多くの資料が取り寄せられている。

3 ICTを効果的に活用する

目の前にはない資料との出会いや発見のためにICTも活用した仕掛けをつくっている。タッチパネル式デジタルサイネージに次々と流れる新着図書や教職員推薦図書

の表紙にタッチすると、書籍情報やレビューが表示される。書架に配置した電子書籍の二次元コードは、スマートフォンで読み込むとすぐにアクセスできるとともに、目に見えない電子書籍の存在に気付かせる効果がある。

新入生向けに実施している図書室ツアーは、職員が口頭で説明する従来の形式から、スマートフォンを使いWebサイト上でクイズを解き、楽しみながら効率よく図書室の使い方を知るセルフツアー形式に変更している。

書籍の貸出については、書籍に貼られたバーコードをスマートフォンアプリでスキャンすることで簡単にセルフ貸出が可能で、図書室から離れたラーニングコモンズ内の書籍も、貸出手続きのため図書室まで持ってくる必要はない。アプリと自動貸出機による貸出は、利用者にとっては時間短縮となり、我々にとっては、これまで貸出業務を行っていた時間を学修・研究支援のための高度なレファレンス・サービスに充てることを可能としている。

4 — 居心地の良い空間をつくる

横浜・関内キャンパス6階から8階のラーニングコモン

ズでは協同的な学びや活発な議論が行われ、5階の図書室は静かに集中する学びの空間として使い分けられている。四季を感じられる窓際の座席や、周囲の気配や音を遮断するブース型の座席ではリラックスして読書を楽しむ学生の姿も見られ、喧騒から離れ、少し一息つきたいといった学生の居場所としての役割も果たしている「写真1」。「お静かに」といった掲示はあえて行わず、知的好奇心を刺激するテーマ展示、出会いや新たな発見のある書籍紹介、壁面の黒板に書かれた学生を読書や図書室に誘う学長と図書館長からのメッセージ等で、学びと読書空間としての雰囲気醸成し、ラーニングコモンズとのゾーニングを行っている。



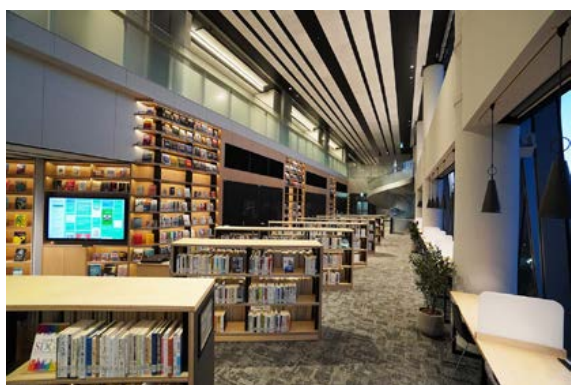
[写真1] 横浜の街並みを望む閲覧席

5 資料や情報と利用者をつなぐ場として

「電子書籍やデータベースを提供するために物理的な空間が必要なのか？」という問いから始まったデジタル図書室の構想は、現代の情報環境における大学図書館の果たすべき役割を再認識させるものであった。

インターネット上に溢れる膨大な情報から正しい情報を効率よく検索することは容易ではない。これに対し、大学図書館には、検索エンジンだけでは得られない高品質で信頼性のある情報を適切にナビゲートできる常駐専門スタッフが、利用者のより深い理解を促進し、学修・研究の質を高めている。また、新たなアイデアや視点を創出する書籍との出会いやテーマ展示は、単に情報を集積し提供するだけでなく、学内の知的活動を広げる役割を果たしている。

電子リソースを中心に提



[写真2] 関東学院大学 関内デジタル図書室

供するとしても、「多面的に学びを支える知の拠点としての『場の力』が大学には不可欠である」との思いが、デジタル図書室の出発点となっている「写真2」。

おわりに

2023年、文部科学省が公開した、「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ）」において、大学図書館は、物理的な空間と仮想的な空間が融合する場、あるいは仮想的な空間に対する高度なインタフェースといった付加価値を持つ場として発展することが期待されている。

今後も利用者にとって学びの中心として不可欠で価値のある場であるために、本学図書館は、時代の変化とニーズに対応し、常にその機能を進化し続ける。

【参考】 科学技術・学術審議会・情報委員会・オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会、「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ）」、文部科学省、2023-01-25、https://www.next.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu29/004/mext_00001.html, (参照2025-3-14)。

紙の読書とデジタル読書

植村 八潮

専修大学図書館長代行・
文学部教授

1 「読書」とは何か

本号への寄稿を依頼され、テーマが「大学生の読書の今を探る」と知ったとき、しばし逡巡することとなった。十年前の筆者の学生時代から続いている話題ではないかとまず思ったからである。

「読書」といえば、新入生を迎える頃になると多くの大学図書館で「読書のすすめ」や「おすすめの一冊」といったコーナーができる。また、東京大学出版会の広報誌『UP』には、毎年4月号に「東大教師が新入生にすすめる本」のアンケートが掲載される。今年で38回を迎える定番企画で、はたして今の大学生が読むだろうかと思いつながら、自分の関心分野で見落としはないか参考になっている。読書

は良いことであるという教養主義的な、そしてだいぶ古びた御旗の下、図書館も出版社も読書推進活動が続けている。と、そこまで考えて、早とちりかなと考え直した。「読書の今」とあるではないか。メディアの多様な拡がりがある中で、「読書」の有り様に変化が見られる。その「読書」の対象には筆者が専門とする電子書籍が含まれているのだろうか。デジタル時代の「読書の今」について考えてみよう。

2 電子書籍を読む

ここで、本誌読者に二つ質問を投げかけてみたい。

・問一「あなたは電子書籍を読んでいますか」

本誌の読者であれば、多くの人がイエスと答えるのではないだろうか。ノーと答えた人も、「電子書籍」を厳密に捉えただけで、ウェブニュース、SNS、デジタル雑誌などで情報を得ている人は多いだろう。

読書と、読書という個人的な行為を持続的に支えている出版を考える上で、電子書籍は、三つの点から重要な位置を占めている。一つ目は、電子書籍なしには今日の出版産業が成り立たない点である。二つ目は、本の購入

を考える上で、電子書籍が重要な選択肢の一つとなっている点だ。電子書籍はコミックと文芸一般書ばかりと思われがちだが、大学教科書や専門書もかなり増えており、新刊とほぼ同時にオンライン書店に並ぶ。夜中であろうが、旅先の車中であろうが、思いついたら電子書籍を購入して読書することができる。電子書籍が読書環境を豊かにしているのだ。三つ目は、誰でも読書ができる環境を整える「読書バリアフリー法」の理念を具現化するには、電子書籍抜きには考えられない点である。電子書籍を合成音声で読み上げることで視覚障害者の読書を可能にしている。

このように出版産業としての電子書籍や、読書環境としての電子書籍に続くのが、読書体験としての電子書籍である。そこで、二つ目の質問である。

・問二「電子書籍を読むことを読書だと考えますか」

つい最近まで読書とは紙の本を読むことであり、それ以外のバリエーションは存在していなかった。電子書籍元年と呼ばれた2012年に筆者が「読書アドバイザー養成講座」(出版文化産業振興財団主催)で初めて電子書籍を取り上げたとき、「電子書籍を読むことを読書」と認め

た受講生は百人中、数名に過ぎなかった。それまで「紙の本」しかないのだから、それが限定的な方法であることに気づくこともなかったのだ。ところが、この15年の間に、読書のスタイルにも大きな変化が訪れた。スマートフォンやタブレット端末で小説を読むことも読書と呼ぶことになった。今年の1月に行った同講座では、受講者のほぼ全員が読書として認めたのである。

その読書対象は、「紙の本」として生み出された作品の電子版とは限らない。今では、最初にデジタルコンテンツとして書かれた膨大な作品が若い人の支持を得てネットにあふれている。作品の質を問う声も聞こえてくるが、文芸出版社は、「小説家になろう」に代表される小説投稿サイトの中から積極的に新人作家を発掘している。これまでネットに投稿された作品で、出版社によって紙の書籍にされた点数は、実に1万8千点を超え、今年中に2万点に届く勢いである。

紙の本が大好きな読書家、愛書家は、このような時代傾向にいまだ抵抗を感じるかもしれない。しかし、長い間品切れになっていた本が、電子書籍として復刊もしている。好むと好まざるとにかかわらず、電子書籍は読書

環境を構成する重要な要素となったのだ。

3 紙の本離れ

「本離れ」の要因としてデジタルメディアが取り沙汰されることが多いが、情報流通という視点で見れば、デジタルメディアは文字情報量の爆発的増大を引き起こしている。相対的に印刷出版物の役割は低下し、電子書籍に代表されるデジタルメディアの重要度は増している。

読書に関する通説の一つに、「若者の本離れ」がある。2000年代の読書推進政策が奏功して、全国学校図書館協議会の「学校読書調査」を見る限りでは、今の小学生は本をよく読んでいる。「本離れ」が顕著になるのは習い事、クラブ活動などに加え、受験勉強に多くの時間が割かれる高校生からである。しかし大学生になっても読書の時間が戻ることはない。全国大学生生活協同組合連合会「学生生活実態調査」によると、1日の読書時間が0分の学生は、5割前後と高止まりである。

最初に「若者の本離れ」が注目されたのは、今日の「紙の本離れ」とは異なる理由である。1960年代に大学

のマス化が始まり、哲学などの堅い本が読まれなくなった一方で、子どものものとされていたマンガが大学生の間で広く読まれるようになった。この現象をメディアが「活字離れ」と呼んで取り上げたのが1970年である。堅い本を読まなくなったことが教養主義的見地から注目され、いつしか「若者の本離れ」として定着した。

この読書の持つ教養主義的なイメージはいまだに失せていない。冒頭に取り上げた『UP』の「東大教師が新入生にすすめる本」特集では、「新入生みなさんの読書プランの一助」とした本は、原則的にすべて紙の本である。もちろん、教養的な本がデジタルファーストで生み出されるまでには至っておらず、大半の電子書籍は「紙の本の電子化」である。ただ、気になるのは、メディアで推奨される読書が「紙の本」だけでなく、デジタルを否定的に捉えた論調である。典型的なのは、昨今の新聞社を中心とした「デジタル教科書批判」である。

考えられる理由の一つが、紙メディアの衰退への危機感であり、もう一つが紙の読書を支持する世代が高齢化していることである。文化庁「国語に関する世論調査」の最新調査（令和6年実施）によると、10代から40代まで

における電子書籍の利用は5割を優に超えているが、60代以上は、逆に「紙の本しか読まない」が5割を超えている。要するに、いまだに教育と文化の分野で発言権を持っている60代が電子書籍を読まず、紙の本しか読んでいないのだ。デジタル教科書を批判し、「紙の読書」を推奨する人たちがおしなべて高齢者なのもうなずける。

4 大学の読書環境

大学の読書環境を形成する図書館の実態は、どうなっているだろうか。文部科学省の「令和5年度学術情報基盤実態調査」によれば、図書館資料費は748億円のうち、紙媒体の資料（図書と雑誌の合計）の経費は210億円、電子媒体の資料（電子ジャーナルと電子書籍の合計）の経費は414億円である。2015年に紙と電子の経費が逆転してから差は開き続け、電子は紙の約2倍となった。少なくとも経費の面において、大学図書館では10年前から電子媒体が主となっているのだ。

筆者の勤務する専修大学は文系学部の多い総合大学であるが、全学生が自分のデジタル端末を持って授業に臨

むBYOD (Bring Your Own Device) を導入している。まもなくGIGAスクール構想のもと、デジタル端末で学んできた学生も入学してくる。物質的な存在である紙の本ならではの特長に対し、紙にはない電子書籍の特長がある。紙と電子は相互補完関係にあり、紙の本ではできない電子書籍の有用性を評価・活用する時代なのである。読書を文字情報リテラシーとすれば、紙の読書とデジタル読書をいかに両立させるかが問われている。

5 植村ゼミの読書指導「新書祭り」について

電子書籍の研究者として、ここまでデジタル読書について述べてきたが、紙の本の読書も重要視している。そこで、筆者が大学で取り組んでいる「新書祭り」について紹介したいと思う。紙の読書の習慣を持たない大学生に対して、「読書の筋トレ」を合い言葉に、少し強引に日常的な読書を習慣づけるプログラムである。

専修大学文学部では3年生からゼミナールが必修である。植村ゼミを希望した学生には3年の4月から11月まで、毎週1冊合計30冊の新書を読み、毎回、4000字の書

評の提出を課している。11月に30冊を読み終えたら、自分の選書や捉え方の傾向を振り返る全体発表会「祭りを終えて」をして終了である。この間、一度でも提出期限に遅れたら、ゼミの単位を与えないことをゼミ履修の条件としてゼミ生を募集する。全員でゴールを達成した発表会は、まさに祭りの打ち上げのような達成感のあふれる会となる。

「新書祭り」はガチゼミプログラムとして2年生の間でかなり知られていて、新聞、放送、広告、映像など数ある専門ゼミの中から、植村ゼミを選ぶ最大のハードルとあってよい。幸いこれまで本を読んでこなかったことを理由にチャレンジしてくる学生も多にいる。

6 先輩による植村ゼミ説明会

2年生の秋に3年の先輩が自主的に行っているゼミ説明会でのスライドから紹介しよう。

★新書祭りってなーに？

植村ゼミの伝統行事、週に1冊新書を読んでひたすら感想を書くお祭りだよ！4月から11月まで、のべ30冊の新書を読

むよ！もしかしてめちゃくちゃ大変なんじゃ……？それが案外どうにかかります。

★新書祭り、すごいメリットあります

【その一】要約力が身につく

新書はだいたい200〜300ページ、文字数は12〜15万字を400字に収めるって実は結構大変。新書祭りで数をこなすと、著者が言いたいこと・抜き出すべきところが覚えてくる

【その二】本を読む速度が増す！

「読書の筋トレ」で読書筋力がつくと、読書スピードが確実に上がる。目次で本文の構成を頭に入れてから読むと理解度アップ！

【その三】自分の興味関心が可視化される

新書を通して、気づいていなかった自分の「興味関心」が見えてくる。知らず知らずのうちに手に取っていた「新たな興味関心」の広がり！自分にワクワク

☆

読書力は筋力と同じと考えている。読書が楽しくなるには、ある程度の読書量が必要で、スポーツで言えば「基礎体力」のようなものだ。読む習慣がなく、読んでいて

もラノベ（ライトノベル）が中心では、論理的な文章や長文を読む力がついていない。よく読書のすすめで、「読書の楽しみ」をうたうが、楽しくなるには、その前に基礎訓練が必須である。水泳でのバタ足、サッカーのリフティング、ピアノのハノン（運指練習）同様、まずは基礎トレが大事。このプログラムを始めたのは、読書量が足りないことで、読書を楽しめない、楽しいと思えない学生が多いと感じたからである。

毎年、振り返りでは、「前半はしんどくて、みんながいなければ続かなかった」「最初は無理だと思っていたけど、気づいたら習慣になっていた」「駅のホームや車内で、スマホではなく新書を開くようになった」「400字書くのが短く感じられるようになった」という言葉が続く。

最初はしんどくても20冊ほど読んで読書筋力がつく、読むのが速くなる。理解度も増して、読書が楽しくなってくるのである。そうすれば、しめたもの。祭りが終わっても読み続ける学生も多にいる。発表会では、同じ図書を読んでも別な点への言及や真逆ともいえる異なる感想と出合うことになる。「他人の視点の導入効果」が指摘される「読書会」の効能効果と同様である。

国語の長文試験で、文意の正しい解釈を選択する問題がある。この手の問題を否定はしないが、「読解指導」が文章には唯一の「正しい」解釈があると吹き込んでいたとしたら、それは読書の楽しみを奪うことだ。本来、読書に「正しい読解（解釈）」などはない。曲解がないのだから、どんなに突飛な解釈も読み手の自由である。

スチュアート・ホール「エンコーディング／デコーディング」（1980）をきっかけに、送り手から受け手へ「正しく」メッセージが伝達されるという伝統的コミュニケーション理論が批判された。意味は非対称性を帯びていて、受け手は送り手の意図どおりには受け取らず、意味をつくりだすのは自律的で能動的な受け手自身だとされる。多様な受け手が多様な文脈で多様にメッセージを読み解いているのだ。ときに文芸評論が作者の意図を超えて、あるいは作者も知らない解釈を作品に見いだすのがよい例である。

最後は、紙の読書のすすめになったが、今は紙もデジタルも手に入る多様なメディア環境で、多様なメッセージを自由に伸びやかに読み解いていける時代だ。それが、大学生の「読書の今」ではないだろうか。

大学生はもう本を

読まないのか？

—図書館職員の視点とデータからの発見—

紀平 宏子

国際基督教大学図書館主査

「若者の読書離れ」は本当か？

実はこれまで図書館職員の肌感覚としては、世間で叫ばれているほど深刻に「若者が読書や図書館に対する興味を失った」と感じてこなかった。根拠の1つ目は2024年9月に発足した国際基督教大学（以下ICU）図書館公認の学生団体「Library Wizards」への関心の高さである。

この団体は図書館のサービスを支える有給の学生サポーターで「図書館展示の企画」「新入生向けツアー」「新着図書情報の発信」「SNS広報」などを担うものだ。2024年6月にスタートアップメンバー12名の募集を告知したところ、ここに多数の応募が寄せられたのであ

る。予想を超える反響に全員と面接を行うことが難しいと判断し、当初2週間に設定していた応募期間を1週間早めて締め切ることにしたが、それでも応募人数は41名に上った。応募者の志望理由も熱量の高いものばかりだった。「読書が好き」「毎日図書館を利用している」「活動を通してもっと本を愛したい」といった数々のコメントからは、「若者の読書離れが進んでいる」という実感は全く感じられなかった。

Library Wizardsの活動開始後も同様の感覚を覚えた。例えば彼らが企画した「Book Perch」という来館者参加型コーナーは「夏に読んだ1冊」など、設定されたテー



〔写真1〕木の葉型メモで彩られた
Book Perch

マに沿って木の葉型メモに書名とコメントを書き、それを木の幹を模した掲示板に貼り付けるといったものだ。特にインセンティブがあるわけではないが、実際に始めてみるとコメントで参加する学生だけでなく、立ち止まって他の学生のメモを読む学生も多く、スタート直後から次々と木の葉が増えていった「写真1」。このような様子を見ていると、若者が図書や読書に興味を失ったとは思えなかった。

さらに、高校生からも本や図書館への愛着を感じる場面があった。2024年12月に高大接続プログラム「ICU Culture Day」の一環として、Library Wizardsが企画した「ICUを読む」というプログラムが開催された。この企画は、高校生が図書館内を自由に



【写真2】「ICUを読む」に参加した高校生

歩き、直感に従って1冊の本を選び、その本の魅力をプレゼンするというものだ。「ICUを読む」は選択制プログラムであったにもかかわらず募集開始直後に満員となり、当日も高校生たちは初対面とは思えないほど活発に交流していた「写真2」。自分の選んだ本について語り合い、他者の話に耳を傾ける高校生たちの姿からは、本や図書館への深い愛着が感じられたのである。

1—I C U図書館における図書の貸出冊数の変化

前述のような肌感覚とは別に、量的データで現状を把握したいと考え、ICU図書館の貸出冊数データを2013年度と2023年度で比較してみることにした。結果は驚くべきものだった。学部生の年間貸出冊数は10年間で11万7959冊から7万9100冊へと減少し、1人あたりの平均貸出冊数も45・2冊から26・6冊に減じていた。また「1年間に1冊も図書を借りていない学生」は79人から996人へ、つまり学部生全体の3.0%から33.5%に増加していた。この数字は、若者の読書離れを深刻に実感していなかった筆者にとって衝撃的だった。

もちろんこの10年間の時代変化の影響は少なくないだろう。Ebookの登録数は6225件から1万7313件に増加し、OPAC (Online Public Access Catalog) で検索可能なオープンアクセスのEbookも100万件を超える。これら電子資料への移行を考慮すると、貸出冊数の減少だけで「本を読まなくなった」と結論づけるのは早計だ。また、コロナ禍を経験した学生は電子資料への親和性が高く、利用への心理的ハードルも低い。OPAC検索結果に冊子体と電子媒体の両者が表示された場合、即座にアクセス可能な電子資料を選ぶことも多いだろう。ICUは学部生3000人以下の小規模大学なので、年間8万冊の貸出冊数も決して悪い数字ではないと考える向きもあるかもしれない。しかし、それでも10年間で貸出冊数が約3分の1減少した事実は無視できない。

ここでさらに一歩進み、貸出冊数トップ層の平均貸出冊数を比較したところ、ある興味深い傾向を発見することができた。2013年度、貸出冊数の多かった学生上位100名の平均貸出冊数は289.7冊。対して2023年度の上位100名の平均貸出冊数は298.7冊だった。つまり10年を経ても貸出冊数トップ層の学生の冊数

は減少しておらず、むしろ約10冊あまり増加しているのである。トップ層の冊数は維持されつつも、学部生全体の貸出冊数・平均貸出冊数は大幅減、年間貸出冊数0の学生数は大幅増。この結果からは「読書をする学生」と「読書をしない学生」の二極化が進行していると考えられる。

全国の大学図書館の傾向と同様、ICU図書館でも入館者数は年々減少傾向にあるが、その状況と上記のデータを踏まえると「図書館に足を運ぶ層は今も昔も変わらず図書や図書館が好き」「逆に足を運ばない層は全く興味がない」という学生間の分断が浮かび上がる。この傾向は、Library Wizardsへの高い関心や図書館内の企画への参加率、高校生の図書館イベントに対する熱量といった、筆者が感じた肌感覚ともある意味矛盾はない。図書館や読書を好む層はよりディープに、それ以外の層は全く関心を示さないという状況が進行していると言えるだろう。

2 大学生にとっての読書の意義

HolschuhとPaulson（2013）は、大学生にとってのリーディングは単なる「読む」行為ではなく、学問的ディスコースを理解し、その熟練した使い手になるための行為と捉えた。そしてリーディングを含む大学でのリテラシー指導を通じ、学生は自分の役割を批判的に検討し、学問的コミュニティの中での適切な対処方法を理解していくと主張する。

Wangら（2022）の研究では、1155人の大学生を対象に読書と学業成績の関係を調査し、積極的に考え、探求する「批判的読書」は大学生の学業成績のみならず専門的素養、一般能力、キャリア・生涯計画能力に有意な正の影響を与えることを明らかにした。さらに、酒井（2018）も大学時代の「能動的に読んで考える」読書が、論旨を組み立て直す力や疑問を解決する力を養い、社会に出た後も困難な問題を解決する基礎的な知力として役立つと述べている。

こういった研究からも大学生にとって読書が大きな価値を持つことは明らかだが、一方では世界的に大学生が

本を読まなくなりつつある現実がある。McMurtrie（2024）は、Z世代の大学生が読書に対する意欲や能力を失い始めている現状について言及している。教員の証言によれば、この現状が学生の学問的パフォーマンスや批判的思考能力に深刻な影響を及ぼしていることは明らかで、教員たちは授業設計の大幅な見直しを迫られているという。

3 貸出データ分析から見えてきた光

大学生にとっては読書が重要であるにも関わらず、その読書離れが進む現状を前に、図書館職員として何ができるのか。実は、ICU図書館の貸出データと教務データを結びつけて分析した結果、大学生の読書量を増やすための手がかりとなるデータを発見することができた。

ICUには「リベラルアーツ英語プログラム（ELA）」と呼ばれるプログラムがある。これは学生の英語力を向上させると同時に、ICUで効果的に学ぶための思考力と技術を養う導入教育で、主に日本語を第一言語とする学生が1年次の大半を費やして集中的に受講

するものだ。学生たちは習熟度に応じてStream 1～4に割り振られるが、そのうちStream 3と4には「多読(Extensive Reading)」コースが設けられている。多読とは、学習者が自分のレベルに合った大量の教材を読む学習法で、読解力や語彙力、学習意欲の向上に効果があるとされる。このコースでは英語書籍であるELT (English Language Teaching) 教材の「多読リーダー」を用いるため、学生は図書館を頻繁に利用し、1年間で25冊前後を読破することになる。

Stream 3における多読コースは選択制であるため、多読コースが必修のStream 4と、多読コースのないStream 2の学生について、ELA終了後3学期間の図書貸出冊数を比較してみることにした。コロナ禍による閉館が完全に解除された2021年度以降の3年間のELA受講生(Stream 4計240人、Stream 2計270人)を対象に、ELA終了後の3学期間で借りた図書の冊数を比較した。

結果は興味深いものであった。Stream 2(多読コースなし)のELA終了後3学期間の貸出冊数平均が22・1冊であったのに対し、Stream 4(多読コースあり)のE

LA終了後3学期間の貸出冊数平均は34・8冊と、実に約1.6倍の差があったのだ。

実は多読コースには以前より、学生の英語力アップだけでなく、学生の読書習慣形成にもポジティブな影響があることが示唆されてきた。ELAの教員AssenとAllan (2016) は、多読コースがもたらす英語向上以外の副次的な効果として「読書習慣の形成に対して、多くの学生から肯定的なフィードバックがあった」と述べている。これまではあくまでも個人の感覚として「読書習慣形成へのプラスの影響」が示唆されてきたが、今回の分析により、実際の貸出冊数データという裏付けが得られたことには大きな意味がある。

図書館利用への心理的ハードルの低減もあるだろう。課題のために毎週のように図書館に足を運ぶうち、図書館という場所への親和性が増したり、その魅力の発見につながることは大いに考えられる。これは学生に「図書館への接地面」を物理的に用意することが、以降の来館・貸出につながる可能性を示している。つまり「読む仕掛けとルーティン」を大学生活の早い段階で作ることが、その後の読書習慣の定着に大きく影響すると考えら

れる。これをうまく利用すれば二極化した学生の中でも特に「貸出冊数0」層へのアプローチが可能になるかもしれない。

今後、図書館としてはこうした仕組みづくりにさらに力を入れていきたいと考えている。例えば、教員と連携し、シラバス構築段階から関与することなども考えられるだろう。学内には学生の読む力の低下を懸念する教員も多く、今回の分析結果を共有することで、読書推進の取り組みを広げるきっかけにできればと感じている。また、世界的な大学図書館のトレンドである「スマートデータの活用」にも注目すべきだろう。図書館の利用統計、利用者のデモグラフィック、リソース使用状況などのデータと、教務データを連携させることで、学生の傾向を把握し、教育サービスの向上に役立てることが可能となる。図書館職員として、学生の読書離れに対し具体的な行動を起こすことが今求められている。今回の結果を踏まえ、学内外で知見を共有しあい、読書習慣を促進する仕組みをさらに発展させていきたい。

参考文献

- Holschuh, J. P., and E. J. Paulson. "The Terrain of College Developmental Reading." College Reading & Learning Association, 2013.
https://cdn.ymaws.com/crla.site-ym.com/resource/resmgr/white_papers/CRLA_2013_WhitePaper_Terrain.pdf.
- Klassen, K., and T. Allan. "Evaluating an Extensive Reading Course." 語学研究, vol. 33, 2019, pp. 22-33.
<https://doi.org/10.34577/00004534>.
- McMurtie, Beth. "Is This the End of Reading?: Students Are Coming to College Less Able and Less Willing to Read. Professors Are Stymied." The Chronicle of Higher Education, 2024.
<https://www.proquest.com/trade-journals/is-this-end-reading/docview/3073159706/se-2>.
- 酒井, 邦嘉. 「読書は脳の想像力を高める——なぜ『紙の本』が必要なのか——」. 生活協同組合研究, no. 508, 2018, pp. 13-19.
https://doi.org/10.57538/consumercoopstudies.508.0_13.
- Wang, X., Y. Zhu, and Y. Zhang. "An Empirical Study of College Students' Reading Engagement on Academic Achievement." Frontiers in Psychology, vol.13, 2022.
<https://www.frontiersin.org/journals/psychology/articles/10.3389/fpsyg.2022.1025754>.

「大学生は本を読まない」は本当か？

―調査から考える読書推進のヒント―

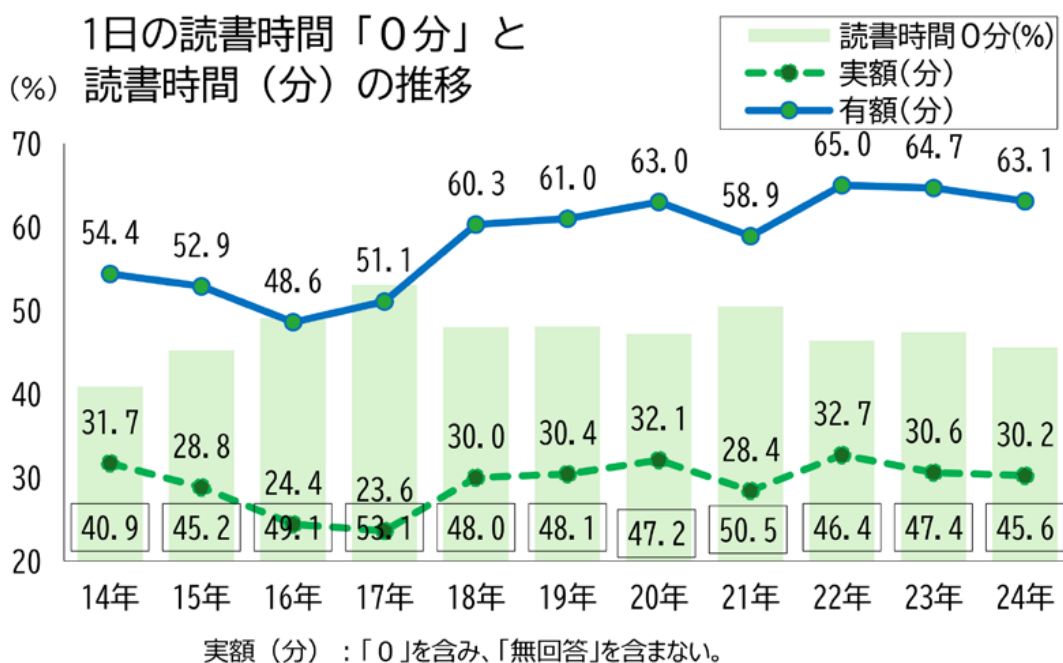
大築 匡

全国大学生生活協同組合連合会 広報調査部

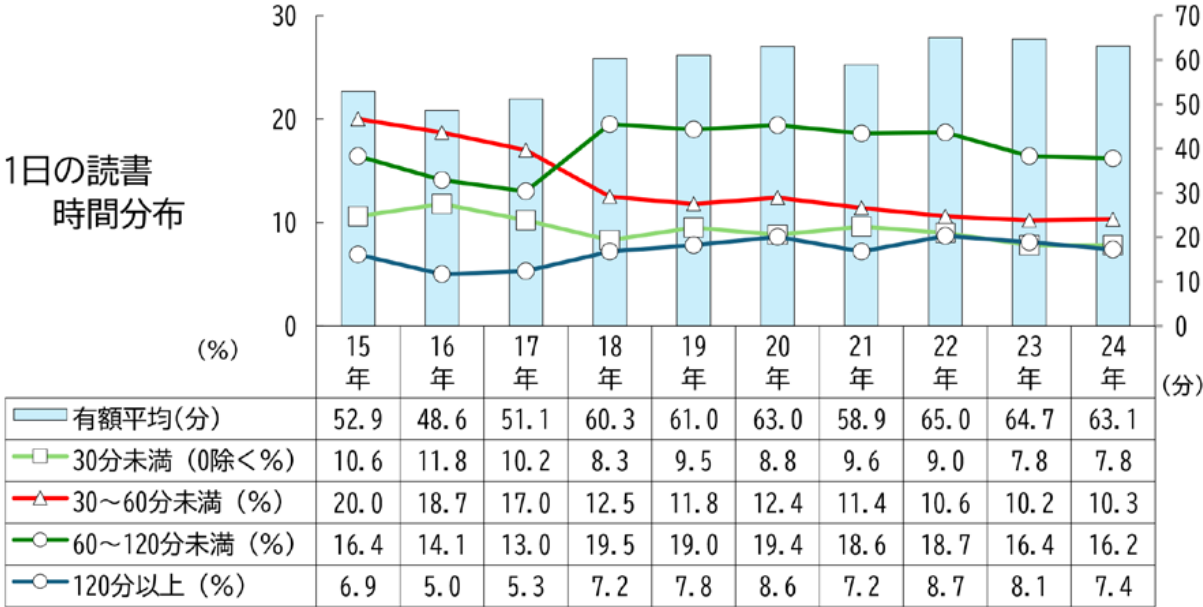
全国大学生生活協同組合連合会（以下、全国大学生協連）が2024年10月～11月に実施した「第60回学生生活実態調査」によると、1日の読書時間分布は「図1、2」の通りだった。

〈特徴〉

1. 読書時間の「有額平均※（分）」は63.1分であり、2015年と比較すると10.2分増加している。
2. 読書時間「0分」は、45.6%であり、10年間で大きな変動はない。
3. 読書をしている学生の時間分布を見てみると、「30分未満」は7.8%で微減傾向、「30分～60分未満」は



〔図1〕1日の読書時間「0分」と読書時間（分）の推移



※有額平均(分)：「0」「無回答」とも含まない平均
※電子書籍含むが読書の定義は限定していない

[図2]1日の読書時間分布

10・3%で2015年の20・0%と比較するとほぼ半減している。

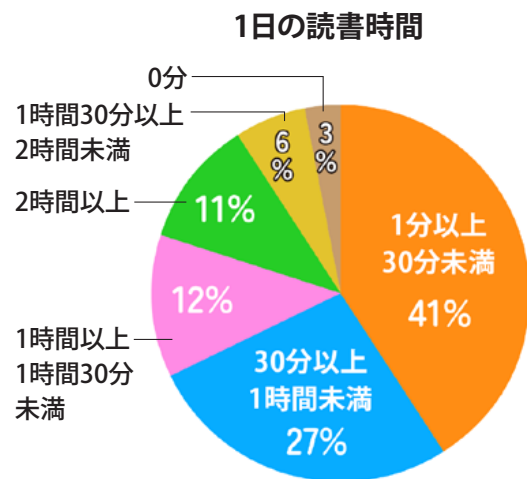
4. 「60～120分未満」は16・2%、「120分以上」は7.4%で、10年間で大きな変動はない。

以上の通り、大学生の読書時間は0分を除いた「有額平均(分)」ではむしろこの10年間で増加している。しかし、1日「30分～60分未満」のライトな読者層が減少傾向にあるため、本を読む学生と読まない学生の二極化が進んでいるといえるのではないだろうか。

読書時間「0分」が45・6%というのは確かに低くない。しかし、文化庁が実施した「令和5年度国語に関する世論調査」では本を読まない人が6割を超えていたことを考えると、大学生はむしろ本を読んでいる方であるともいえる。

注目すべきは1日「30分～60分未満」のライトな読者層の動向だろう。この層に属する学生は、適切な働きかけ次第では大学生活を通じてよい読書習慣を維持できるかもしれない。もし何も働きかけをしなければ、忙しい学生生活のなかで本を読むことよりも他の活動が優先さ

	人数	%
0分	9	3
1分以上30分未満	126	41
30分以上1時間未満	85	27
1時間以上1時間30分未満	38	12
1時間30分以上2時間未満	19	6
2時間以上	33	11
合計	310	100



[図3]読書に関する意識調査

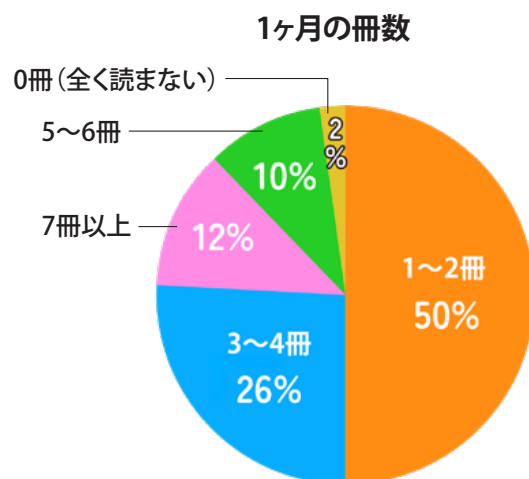
れ、せっかく身についた読書習慣も失われてしまうかもしれない。

全国大学生協連は「読書マラソン」という活動を長年にわたって続けている。これは、大学4年間で本を100冊読もうというキャンペーンだ。「4年間で100冊」というと、大学関係者の中には、学生の目標としては物足りないのではないか、という意見もあるかもしれない。しかし、私たちは「1日15分〜30分程度」「月1〜2冊」「4年間で100冊」という、無理なく続けられる目標設定をして、本を読むことが大切だと考えている。読書マラソンでは読んだ本に対するコメントを投稿してもらい、店頭でおすすめ本として掲示している。短いコメントを書くことは表現力の訓練にもなる。

読書マラソンエントリー者に対して「読書に関する意識調査」を2024年11月に実施し、310名から回答を得た[図3、4]。

読書マラソンエントリー者の68%は1日の読書時間は1時間未満で、50%は月1〜2冊程度の本を読んでいるということがわかった。前述の「第60回学生生活実態調査」で減少傾向にある「30分未満」「30分〜60分未満」の

	人数	%
0冊（全く読まない）	8	2
1～2冊	154	50
3～4冊	81	26
5～6冊	31	10
7冊以上	36	12
合計	310	100



[図4]読書に関する意識調査②

ライトな読者層が、読書マラソンにエントリーしている。さらに、読書マラソンエントリー者への意識調査によって、今の学生が考える読書像が、一般的に思われている読書像と少しずれているのではないかという発見があった。

「図5」は読書マラソンエントリー者が考える読書のイメージに近いものを最大3つまで複数選択によって聞いた結果だ。学生たちは読書を「楽しみ・癒し」としてとらえており、次に「教養・成長」ととらえている。「勉強・学習」ととらえている学生は相対的に少ない。とくに、「勉強や課題として読むこと」「社会の出来事や流行を知ること」等の目的で読む人は顕著に少ない。

学生たちにヒアリングした結果でも、たとえば「課題のために教科書・参考書を読むこと」や、「研究のために専門書を読むこと」は、読書ととらえていないという声があった。すべての学生がそうであるかどうかはわからないが、義務として「本を読むこと」は、学生は読書であると考えていない可能性がある。

周知の通り、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が議員立法にて成立し、2001（平成13）年12月12日施行以後、政府は子ども読書活動推進基本計画を策定し、

		件数
楽しみ・癒し	感動や楽しさを味わうこと	213
楽しみ・癒し	暇つぶしや気分転換	120
楽しみ・癒し	癒しや安心感を得ること	69
教養・成長	文章や言葉の美しさを味わうこと	124
教養・成長	新しい視点や価値観に触れること	156
教養・成長	自己啓発や自己改善のため	44
教養・成長	他者との会話や議論のための準備	17
勉強・学習	知識を得ること	144
勉強・学習	社会の出来事や流行を知ること	3
勉強・学習	勉強や課題として読むこと	13

[図5] 読書マラソンエントリー者が考える読書のイメージ

子どもに対する読書活動を推進している。現在の学生は幼少期から読書教育を受けてきた世代である。

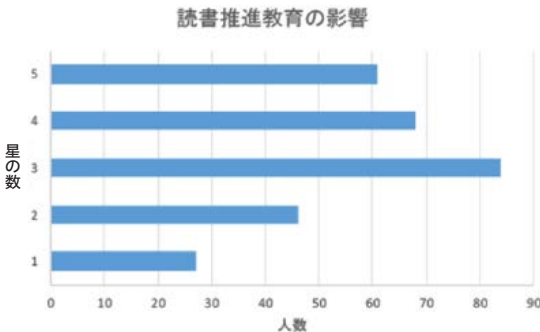
読書マラソンエントリー者に対して、小学校・中学校で朝の読書会等の「読書推進教育」を受けたことがあるか聞いたところ、92%が「はい」と答え、さらに読書推進教育を受けた学生に現在の読書習慣に肯定的影響があるかを5段階評価で聞いたところ、平均は3.31であり、若干だが肯定的影響が認められた[図6、7]。

以上の「第60回学生生活実態調査」と「読書マラソンエントリー者 読書に関する意識調査」の二つの調査結果を踏まえた上で、下記の通り、今後に向けた問題提起をしてみたい。

まず、「大学生が本を読まない」というのは必ずしも事実とは言えない。確かに1日の読書時間「0分」が45.6%というのは低い数字ではないが、日本人全体の不読率が6割を超える（文化庁「令和5年国語に関する世論調査」）ことを考えると、むしろ大学生は本を読んでいるといえるのではないか。本を読んでいる学生の読書時間（有額平均（分））は増加傾向にあることを考え合わせると、本を読む学生と読まない学生の二極分化が進んでいる

星の数	人数
1	27
2	46
3	84
4	68
5	61
計	286

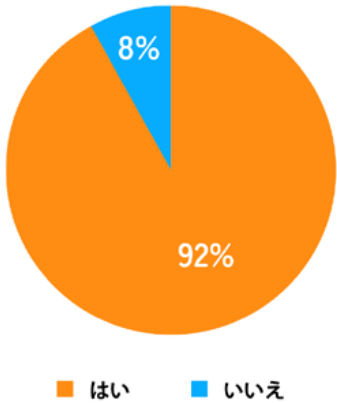
※この質問は、直前の質問で「はい」と答えた人のみなので、286人が合計数になります。



[図7] 読書習慣に肯定的影響がある学生の数

	人数	%
はい	286	92
いいえ	24	8
合計	310	100

読書推進教育を受けたか



[図6] 読書推進教育を受けた学生の割合

るという方が実態をよくとらえているだろう。
1日の読書時間が「30分未満」や「30分以上1時間未

満」の軽い読書を楽しんでいる学生たちにどうすればアプローチすることが出来るだろうか。この層の学生たちが、小中学校段階までの読書推進教育によって育まれてきた読書習慣をいかに維持することが出来るのか。このことが課題ではないだろうか。

小中学校でおこなわれている「朝の読書活動」では「みんなでやる、毎日やる、好きな本でよい、ただ読むだけ」が続けられる秘訣だという。同じことは大学生に読書を勧めるにあたつても言えるのではないだろうか。学生たちが考える読書像は「楽しみ・癒し」であり、義務的に本を読むことは読書だと思われていない。学生たちの等身大の読書像に寄り添って、まずは月1〜2冊程度、1日30分未満でも本に触れる習慣をつけることから始めることが効果的と思われる。全国大学生協連が発行している冊子『読書のいずみ』や、全国の大学生協で取り組まれている「読書マラソンの活動」がその一助になれば嬉しく思う。大学図書館や先生方とも協力しながら読書推進活動を旺盛に進めていきたい。

※実額平均と有額平均について
実額平均（実額）…無回答の例数は含まず、「0」の例数を含む平均、特に注記のない「平均」は実額平均
有額平均（有額）…無回答と「0」の例数は含まない平均、「0」を除く回答の平均